

山下文雄（久留米大学教授）監訳

発達の視点からみた障害児の療育

第2巻 障害児の心理的、社会的問題と教育

西本順次郎（教育医学研究所）

このたび、ミュンヘンのヘルブリュツゲ教授によって編集された「社会小児科学」が、山下教授監訳のもとに翻訳されたことは、非常に時宜を得たことと思います。ヘルブリュツゲ教授は私とは20年近くの知人であり、学友でもありますから、その考えはよくわかります。筆者自身が述べているように、発達リハビリテーションが新しい道標として、小児科学の課題となっています。彼は、私が知った頃には、親のいない子どもの「剥奪症候群」の仕事をしていたが、それから早期診断と早期治療、特にモンテッソーリ治療教育へと発展したものといえます。ミュンヘン機能的発達診断法は、神経生理学と神経運動学の立場から構成されていますが、ロシアやチェコスロバキアのものと十分検討されて作られています。彼のいう多重障害者の援助のためのもので、日本で有名なボバス法、ボイタ法とともにミュンヘンのセンターで取り入れられており、いずれも共同作業の関係にあります。今回の第2巻は、障害者の心理診断の全文と、聴力、言語、発語障害の診断、治療上の問題とモンテッソーリ治療教育学の一部を削除したものと、さらに社会的問題と援助の一部を削除したものが翻訳されています。従って医学的よりも

心理学的、社会福祉学的問題が主体となっております。通読してみますと、心理診断のところでは“知能は訓練可能か？”という項の示すように、知能やテストの問題を、簡単ではあるが簡条的にかなりくわしく説明したうえで、知能の変容性のある考え方に進めていると思います。行動観察の項でもその妥当性についていろいろ説明していますが、大人と子どもとの共同作業としての観察のし方とか、学習能力診断の考えを入れた観察を導いています。この考え方が治療教育に導入されるものと思われれます。教授は1968年頃だったと思いますが、モンテッソーリ子どもの家を見て自分で覚醒されたといっています。モンテッソーリ教育学の再発見が彼の社会小児科学の中核的力となっていることはいうまでもありません。

ヘルブリュツゲ教授は、1960年からミュンヘン大学小児医学教授として年少者医学研究所で研究を始め、1968年にミュンヘン小児センターを設立し、自ら所長となって社会小児科学の実践に入りました。1970年にモンテッソーリ統合幼稚園と学校を設立して今日に及んでいますが、センターの主旨は、障害児治療にあたっては社会小児科学の立場に立つこととはいうまでもありません。幼年期

の子どもの生活のすべてを占める学習過程の基礎となるといいます。また、多重障害の子どもの治療に必要な新形式の診断と治療を行います。そのための説明が今回の著作の各章にあたるわけです。神経生理学的な訓練療法、行動療法、発声、発語及び言語療法などが含まれています。これらがモンテッソーリ教育の障害児向けに、個別小集団療法として取り入れられています。この著作の終わりにありますように、早期治療には両親の助力が必要で、幼児期、小児期における親子関係を利用しようという発想がうかがわれます。入院治療の条件としては、両親が治療者と成り得ない時とか、子どもの教育に集中できない時、あるいは時間的、経済的、治療器具などのために入院が有利な場合、行っているようです。興味のあるのは、障害の強い子どもの場合特にその問題を徹底的に解明したい時と、養子縁組みの手続きをする準備のためという条件があることです。

結局、ヘルブリュツゲ教授は、モンテッソーリ教育学は、医学的治療教育学として、また健常児の集団に障害児を社会的に統合するという社会小児科学的概念を示しているといえましょう。この翻訳はその意味で、具体的に、また実践的に、いくらか内容が説明向きにできているといえましょう。実践にあたる心理職、ケースワーカー、訓練士の方々には十分役に立つと思いますので推薦致します。

（B5，頁200，1983，¥5,600，
〒300，医学書院刊）